

遊びを中心においた保育の探求

—日本保育学会 第60回大会

シンポジウム討論者のリフレクション—

上垣内伸子・嶺村法子

矢野智司・友定啓子

岩田純一・浜口順子

◇序にかえて◇

司会 浜口順子

このシンポジウムは、テーマの「直球と真ん中」
ぶりがかえって新鮮に映ったのだろうか、三百人収
容可能な会場に入りきれないほどの参加があった。

「遊び」が子どもに、そして保育においていかに重

要か、という本質的な問題について活発な議論と
なった。司会を務めたのが本誌の編集者であったこ
ともあり、シンポジウムの直後に即、登壇者の皆様
に振り返りを依頼し、この記事が実現した。司会役
として、このようなおもしろい議論に立ち会うこと
ができたことは幸運であったし、事前にこれほど丁
寧に打ち合わせをしたシンポジウムも初めてで、こ

うした企画に取り組む姿勢についても考えさせられる貴重な経験となった。語り合いの場から生まれる偶然の生き生きしさにも、計画性がある程度必要であるところは、保育実践とかわらない面でもあるう。
(お茶の水女子大学大学院)

◇遊びを中心においた保育の探求◇

企画者 上垣内伸子

五月十九・二十日に開催された日本保育学会第60回大会において、準備委員として表題のようなシンポジウムを企画した。子どもの自発的な遊びを手がかりに、保育の基本となるものを、今、改めて追求したいという思いからである。そのように強く思うに至った理由は二つある。

一つには、家族援助、育児相談・教育相談など、対親、対大人という役割の比重が保育者の中で増してきたことにより、本来的孩子もへの援助という保育の本質にかかわる部分が脆弱になってきている

のではないか、保育者自身が保育とは何かをとらえるにくくなってきたのではないかと感じていることがある。私自身は、保育の本質とは、子ども自身が自らの遊びを遊ぶことを通して自らを育てていくことを共感的に理解しながら援助していくことではないかと考えているので、まずは、保育の場での子どもの「遊び」をテーマにしようと決めた。

二つ目には、子育て支援や幼保小連携などが保育の今日的課題とされる現状において、幼稚園・保育所の生活の中で、子どもの中に何がどのように育っているかを、保護者や小学校の先生に対して、相手にわかってもらえるような表現で伝えることが求められているということがある。

ここでは、子どもたちは遊びを通して何を学んでいるのか、それに対してどのような意図をもって保育を計画し援助しているのかを、保育現場特有の言葉や言い回しではなく、相互理解の成立を可能にする言葉と表現を用いて伝えていくことが必要とされ

る。しかしながら、これは思っている以上に難しいことであり、また、相手にわかるように表現することによって、保育そのものが親や小学校教師にわかりやすいものに変容していく恐れもあるやに思われる。たとえば、幼保小連携の研究会や公開保育において、「この遊びによって具体的にどのような能力が育つのか」と問われたのに対して、○○力や△△性などと、発達の要素に還元して説明することがあるかもしれない。その自分の答えに違和感をもちながらも、相手が納得すると、自分の中にもそのような視点が生じていくことはないだろうか。遊びを通しての子どもの成長をどうとらえているのか、自身に改めて問いかける必要を感じている保育者は多いのではないか。

このような理由から、保育の中心に「遊び」を位置づけ、子どもが遊ぶとはどういう意味をもつ行為なのかについて問いかけることとした。子どもの「遊び」を「発達」や「幼児期にふさわしい学び」

という言葉に従属するものとしてではなく、育つことと生きること、子どものまるごとの内発的成長にかかわるものと位置づけて、「遊び」をとらえようとする試みである。

そのために、シンポジストには、子どもが幼稚園や保育所で何を考え、誰とどのように遊び、育とうとしているのかについて、保育的な視点でかかわったり観察したり考えてこられた方をお願いした。遊びをテーマにするならばぜひこの方の話を聞きたいと、私自身が強く願っていた五人の方の登壇が叶ったことは、何より大きな喜びであった。

当日は、嶺村さんからは、ご自身の幼稚園での十九年間の保育実践での事例を基に、保育の場での子どもの遊びと保育者のとらえについての課題提供があり、大学院生時代に幼稚園で二か月間保育したことで、人が育つということに正面から向かい合っただけで考えたいと思うようになったという矢野さんは、子どもにとっての遊ぶことの意味や保育における遊

びの重要性について、絵本『かいじゅうたちのいるところ』（モーリス・センダック作 神宮輝夫訳 富山房）を紹介しながら話された。附属幼稚園の園長経験をもつ友定さんからは、子どもの能動的な遊びが保育の中にどのように位置づき、遊びを起点としてどのように保育援助は展開されるのか、子どもと保育者の両方の視点からの発言がなされた。

三人の話題提供に対し、発達心理学者であり附属幼稚園の園長もされ現場の保育者との交流も多い岩田さんからは、「遊び」論の抽象度が高くなっていく部分を実践の地平線に戻すかのような指摘がなされ、フロア参加者一人ひとりが、自らの日々の保育実践を通して考え続けることの必要性を感じての終りとなった。

（十文字学園女子大学）

◇遊ぶ子どもの傍にいる保育者として◇

話題提供者1 嶺村法子

新任のころ、学級の子ども数人が廊下と保育室に

別れ、天窓を通して遊具をやりとりしていると、「無駄な遊びをしている」と指摘され、「無駄な遊びであるのだろうか？」と反発を覚えた。「壁の向こうの見えない相手に向かって投げたものが、投げ返されてくると信じることで成り立っているこの遊びは、子どもにとつて無駄な遊びなのだろうか？」と。また研究保育の際、「子どもたちが遊べていない。何をしようとしているのかわからない」と指摘され、「遊べていないというのは、どういうことなのだろうか？」と疑問に思った。

それから二十年近くたった今、新任保育者の保育を見ていて、「もっと魅力的な環境があれば、もっと違う形で遊べるのでは？」と思うことがある。そこから「無駄な遊び」「遊べていない」と言われたことを振り返ると、一人ひとりが今やりたいことは保障していても、その年齢にふさわしい経験を積み重ねられるよ



うな、知的好奇心をくすぐるような環境が用意されていないということを指摘されたのだということに思い至る。子どもが自分から「おもしろそう！」と取り組む環境は、一人ひとりの、これまでの経験や興味・関心への理解がないと準備され得ないし、「ちょっと難しそう、でも挑戦してみたい！」と思える環境の構成は、発達の道筋を理解して初めて可能になる。

だが一方で、保育者はそうした理解を一時保留にして、身体の応答として日々の保育を行っている。「○○ちゃんのために」と喜ぶ顔を思い浮かべて用意する環境、「こうしてみない？」ととっさに判断して行う提案、思わず夢中になって一緒に遊ぶ瞬間…。保育は、保育者その人がそこに表れる行為である。教材の引き出しの多少や、発達についての理解の深浅を超えた、保育者の何が子どもの遊びを支えるのか、保育者がかかわった事例から、一緒に考えていきたい。

(東京都中央区立明正幼稚園)

◇生命原理としての遊びと保育の課題◇

話題提供者2 矢野智司

遊びには遊ぶことそのこと以外にはどのような目的もない。遊ぶこと自体が喜びであり目的なのだ。保育者も教育学者も心理学者も、遊びには遊びを超えた目的がないという遊びの本質を、もつと真剣に受け止めるべきだ。

大人の生活からみれば、遊びは日常の生活を彩る補完物のように思われるが、遊びはふだんの有用性を求める生活^①とは別の生命^②の原理を示している。何かのためにするのはない遊び！ 有用な生産活動とは無縁の遊び！むしろ有用で生産的な活動を侵犯し破壊するのが遊びの本質である。有効に有用なことのために使えたかもしれないエネルギーや時間を、惜しげもなく役に立たないことに蕩尽することが遊びの醍醐味だ。その遊びの中で我を忘れた瞬間、自他の境界線が溶ける体験が出現す

る。この遊びの体験において子どもは生命に触れる。保育は一方で子どもを発達させるとともに、他方で子どもが生命に触れるように深い遊びの体験をもたらず課題を担っている。

シンポジウムでは、センダックやエッツの絵本を例に挙げながら、なぜこのような遊びの体験が幼児教育において重要なのか、そしてなぜ遊びを単なる手段としてとらえることが問題なのかについて明らかにしようとした。

遊びの原理と保育の原理を十五分で話すというこ
とで、無理を承知の発表だったが、日ごろ、このよ
うな子どもの深い遊びの体験を共に生きている保育
者が聴き手だったこともあり、予想以上に理論の骨
子をくみ取っていたように思う。また日々の
実践における遊びの重要性を例証された嶺村さん
と、発達に回収されない遊びの特性を現場に立ちつ
つ指摘された友定さんとの並びのよさも大きな助け
となった。最後に、理論の内部から重要なポイント

をいくつも指摘してくれた岩田さん、シンポジウム
の進行をテンポよく仕切ってくれた司会の浜口さん
に感謝したい。
(京都大学)

◇教育内容としての遊び◇

話題提供者 3 友定啓子

遊びは人間にとって労働や生活と同様に生きてい
く上で不可欠な行動様式であり、子どもの特権とい
うわけではない。この三つはそのまま生きることの
内容であり、教育内容にもなる。

労働や生活に比して遊びが幼児期の教育内容とし
て優位な点は、第一に遊びの行動原理はおもしろさ
や楽しさ・好奇心という快樂原理であり、その結果
の自己充実を目的とすることにある。その原理に従って子どもは肯
定的にこの世界に出合い、この世
界や自己に対する基本的信頼を得
ることができる。第二に遊びの特



性である自由・自発・自己目的性によって、子どもは能動性を発揮でき、遊び内容を創る場になる。第三に、遊びにおける人間関係は率直で多様、複雑であり、快樂原理によって共生を志向するという特徴がある。

保育者の役割は、子どもの遊び体験の意味を共有し、子どもの自己肯定感や世界への信頼を培うこと、子どもの能動性を支えるための二重の主体性をもつこと、遊ぶ姿からその子への理解をえていくこと、遊びの人間関係を支えることなどについて述べた。

今回のシンポジウムに誘われたことで、幼児と人間にとっての遊びの意味をとらえ直す機会をもてたことが私にとっての収穫だった。ここをはっきりさせないと「遊び」が「学び」に従属させられるという危機感をもっていたからでもあった。上垣内さんのていねいなマネージメントのおかげで、打ち合わせも楽しく、それぞれの論点も理解でき、当日もエ

キサイティングで、矢野さんを中心に終了間際までユーモアを交えた遊びの議論が続いた。三人に共通していたのは、生きる子どもの内側から遊びを考えていることだという岩田さんの指摘もうれしかった。私自身は質問に答え切れなかったもので、それは宿題としてもち続けて、次へつなげていこうと考えている。

(山口大学)

◇遊びのシンポジウムに遊んで◇

指定討論者 岩田純一

話題提供の三者には共通の姿勢がうかがえた。それは「遊んでいる」という子どもの主観的な状態を問題にし、子どもの側から遊びの意義を考えようとすることであろう。

ともすると子どもの遊びが、役に立つ・立たないといった有用性の枠組みに回収されてしまいがちな中で、矢野さんの提案は参加者にとって新鮮であった。矢野さんは、遊びに蕩尺する中で、子どもは自

然の中に溶解し、その中で「生命原理に触れる」体験ができると言う。確かに、このような超越的な遊びの体験が大切ではあるとしても、子どもはどれほど遊びの中に忘我的に溶解しているのだろうか。園では仲間と一緒に遊びが中心であり、そこでは遊びの中に現実における人間関係、自他の力関係などが見え隠れすることが多い。果たして遊びに蕩尽するとか、忘我的に深く遊びの世界に入っていくとはどのような子どもの状態なのであろうか、また保育者がその導き手としてどのような役割を果せるのであろうか。恐らく、嶺村さんからの示唆のごとく、子どもの遊びに共になつて楽しむ保育者の遊び心と感性が、そのような遊びを支える大切な条件になるのであろう。

子どもは発達のために遊ぶのではないとしても、他方では、遊ぶことが結果として発達の苗床になつていくことには間違いない。従つて、保育者には、どのような苗床になつていくのかを問い、しっかり見

通しをもつた遊び保育の実践が必要ではないかと思ふ。これは友定さんの論点でもあろう。確かに、遊びが、たやすく発達や教育の手段へと回収されてしまふ危険性には自覚的でないならぬとしても。

人の発達とは、元々が自然の中に溶解したような生の状態から、次第に自然を対象化して眺め、それらを分析的に概念化してとらえられるようになってくる過程でもある。幼児期には、そのような他（物や人）への距離化の中で、それらに対峙する自己の意識化も高まってくる。すると矢野さんの言う溶解体験としての遊びは、発達とは全く逆行する回帰的なベクトルをもつ。しからば、なぜそのような遊び体験が保育の原点として位置づけられねばならないのであろうか。時間があれば議論を深めたかったところでもある。最後に、今回はとても楽しく刺激的な遊びのシンポジウムに遊ぶことができたが、これも導き手として企画者、司会者、話題提供者の諸先生に深く感謝しなければならない。（京都教育大学）